

令和5年度第18回

訪問看護研究発表会 報告

日時: 令和6年2月24日(土)

14時~16時30分

場所: ハートピア京都3階大会議室

* 多機関に向けて後日オンデマンド配信あり



コロナ禍の影響により、WEBでの開催になっていましたが今年は漸く集合型にて開催することができました。皆様のご協力に感謝いたします。



司会

訪問看護ステーションさいきょう
新井 妙子氏



開会あいさつ

訪問看護ステーションひなた
協議会会長 團野 一美氏

今日は令和5年度第18回訪問看護研究発表会にお集まり頂き、また、日頃より協議会の活動にご尽力ご協力いただき本当に感謝申し上げます。

さて、この研究発表会ですが5年ぶりに集合で開催することができました。発表される皆様は緊張されていると思いますが、内容はバラエティーに富んでいて一年間、一生懸命取り組まれた成果をととても楽しみにしています。

今回の研究発表会では後日オンデマンド配信を用意しております。去年の配信でも様々な方にご覧になっていただき、大きな反響がありました。

最後になりますがここまで研究のサポートをしていただきました松本先生、本当にありがとうございます。また、この会を開催するにあたりましてご尽力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げます私の開会の挨拶とさせていただきます。



講評

京都橘大学看護学部

松本 賢哉 教授



A地区 男性介護者の語りにみる「男性ならではの強み」
～主観的幸福感を支える要因の考察～
社会福祉法人清和会
みわ 訪問看護ステーション 杉山 菜穂子



広報委員感想

妻を介護する男性介護者に対して半構造化インタビューを実施し内容を逐語化して分析されています。男性介護者の問題点が多く指摘される傾向にある中、彼らの強みを引き出し主体的幸福感にアプローチするという出発点からして既にポジティブな問題解決意識の高い内容でした。

質疑応答ではそれまでの長年の夫婦関係の在り方も幸福度には影響があると思われるが幸福度と実際の介護力の関連に関して質問やこの結果をもとにしてのさらなる看護の発展に関しての期待のご意見がありました。今回の結果では介護経験年数による幸福度の高低に関連は無いという事でしたが介護力を支える支援のポイントとしては重要な視点を学ぶことができました。



インタビュー内容に対して尺度を用い幸福感を抽出し、高群と低群に分けて比較するという研究でしたが今回、結果は見比べやすくおもしろい結果になったと思います。低群に必ずしも介入しなければならないというのではなく今回低群となった方たちが語られた言葉を現場で聞いた時に「あ、この人満足度低いのかな、」と感じられるようになって欲しいです。

B地区 達人訪問看護師の自立している認知症高齢者の排便
確認とケアに関する実態調査
医療法人洛和会訪問看護ステーション北大路
山内 あゆみ



広報委員感想

現場での困りごととして多くあげられる認知症の方の排便状態の把握について「達人看護師」8名のインタビューから達人たちの看護の視点やアプローチのポイントをカテゴリー分類されています。浣腸や摘便が上手にできる事より達人たちが大切にしている「自然排便への試み」についての重要性を学びました。

質疑応答では必ずしも達人訪問看護師が訪問するわけではない現状として若手への指導のポイントについての質問が上がりステーション全体の質の向上としてスキルや視点の伝達の重要性を学びました。



認知症の方の排便は良くあるテーマですが、本当に難しいテーマです。今回は達人たちを集結するという、所属されている組織の強みを生かされた研究内容で、達人看護師のやっている事が浮き出されて来ましたが、今回の結果は、経験の浅い人への伸びしろとして重要な指針になりましたが、今回の結果をもとに経験の浅い人に挑戦してもらい、それができる人、できない人の違いが出てきたら次の研究として更なる発展が期待できます。

C地区 在宅におけるパーキンソン病患者のQOLの実態調査
と看護介入の関係性の検討
～QOL尺度SEIQoL-DWを用いて～
独立行政法人国立病院機構
訪問看護ステーションうたの 松田 麻衣



広報委員感想

様々な疾患を抱える方々と対峙する中で「QOLってなんだろう」と思ってしまう事が多いですが、そこに焦点を当て、今回は疾患に対して否定的な感情を持つことが多いと言われるPD患者の方々のQOLをシーコールドイダブリュー（SEIQoL-DW）という尺度と視点を用いて研究され、患者と看護師両者の思いの結果に驚きました。

質疑応答ではシーコールドの調査実施時間やタイミングなどについての質問があり、利用者の負担に配慮しながらの調査の導入や効果的な調査のタイミングについて教えて頂きました。



PDに対して多様なアプローチで既存のステーションさんの研究で看護師の思いと患者が実際に思っている事、大切にしている事のの違いで面白い結果が出たと思います。今後SEIQoL-DWは色々な人に使えるのではないかと思いますし私自身も勉強になりました。

D地区 京都府訪問看護ステーション協議会における直行直帰型ステーションに着目した働き方の実態調査
合同会社フレミル
訪問看護ステーションふれみる 橋本 周子



広報委員感想

コロナ禍を経て訪問看護ステーションにも働き方の多様性が求められていますがその一つとして直行直帰型の導入があります。アンケート結果をもとに直行直帰型を導入しているステーションの特徴を分析・考察され導入にあたり何が必要であり、直行直帰型の問題点とされている情報共有や孤立をカバーするためにどのような努力をされているのかを明らかにされています。

質疑応答では調査対象や具体的数値に関しての質問が上がりました。社会の流れを汲むと発展性のある研究であり今後のステーション運営に関してはとても興味のある結果でした。



本来なら、直行直帰型のステーションに二次調査をして研究を深めたかった所であったが結果がたった3件でありさすがにこれではという所もありました。アンケート結果の出し方について平均値を出すのではなく標準偏差を出した方がより分かりやすかったかもしれない。また、調査範囲を変えたりなどで発展していける研究であると思われまます。

E地区 ICD留置児の対応プロトコルの導入とその効果
-多職種で安全に支援できる方法を探して-
医療法人徳洲会
宇治徳洲会訪問看護ステーション 高井 萌々香



広報委員感想

3つの訪問看護ステーションと7つのヘルパーステーションが関わるICDを留置された1歳児の支援に対して支援者の不安の軽減をはかる為プロトコルを作成してヘルパーの不安の軽減に繋がった様子を紹介されています。

質疑応答ではヘルパーさんに対しての医療行為の指導や支援に関して質問や意見が上がり関心の高さがうかがえると共に合計10事業所が足並みを揃える苦労が垣間見え、そのチームに支えられている事例のお子様の笑顔を想像し、その尊さを実感しました。



大変な医療的ケア児の支援に対してヘルパーさんが受け入れてくださるための良い事例になったと思われまます。アンケートでは不安をもう少し細かい尺度で抽出しても良かったかもしれないし、ヘルパーさん個別で時間の経過やプロトコル導入前後に伴う不安の増減を調べても面白かったかもしれません。

F地区 訪問看護師の職業的アイデンティティ尺度から質の向上に向けての取り組み
株式会社アソシア
訪問看護ステーション アソシア 谷口 幸子



広報委員感想

病院での看護のお仕事と訪問看護での看護のお仕事は実際には似て非なるものがあります。訪問看護師としての自覚と自信を培う為に取り組まれたカンファレンスの効果はとても興味深いものでした。

質疑応答ではカンファレンスの開催の具体的内容についての質問が上がり、定期的なカンファレンスを開催するベテラン看護師の配慮や苦労をお聞きすることができ、その苦労があってこそそのスタッフの成長があるのだと思いました。



訪問看護ならではのアイデンティティの確立のしにくさがあり、事例を通しての気づきを得てお互い確認しあうことはベテランにとっても経験の浅い看護師にとっても双方良い影響があると思われます。数は8人と少なかったが前後の比較をきちんとしてみるとという意味合いでアンケートの結果を有意検定にかけてみたがこのような結果の数の捉え方も今後の研究の参考にして欲しいと思います。

G地区 統合失調症引きこもり患者が情緒的支援によって社会復帰に繋がった事例 —訪問看護ステーションと生活介護事業所のスタッフが同一である事による効果—
株式会社やすらぎの家
訪問看護ステーションやすらぎの家 川村 智子



広報委員感想

精神障害者の支援において訪問看護の情緒的支援がセルフスティグマにどのような影響を与え、行動変容に繋がっていったのかを記録を紐解き分析した研究で利用者がセルフスティグマの尺度の中を行きつ戻りつしながら次第に軽減していき、引きこもりから脱していく様子を紹介して下さっています。

質疑応答では実際の訪問にあたった職員の数担当が1人ではなく4人で関わっていたということが明らかにされて、利用者にもスタッフにも負担が偏らない努力のご様子が伺えました。また、スティグマ尺度という新しい視点についての学びを得たという感想も聞かれました。



この研究は「後ろ向き研究」であり、おもしろい結果が出た時に過去の記録を起こして研究をしていくという方法です。セルフスティグマを抱える人に対して肯定感をもたらしてくれたり、努力を認めてくれる人や対応を情緒的支援者と言いますが間合いを大切にその方に寄り添う支援が伺える研究であったと思います。

質疑応答の様子



発表者の皆様お疲れさまでした。久しぶりに皆様お揃いになって盛大に開催されたことをうれしく思っております。また、来年研究を考えられている方も参加されていると思いますがまず言いたいのは、研究の疑問だけをしっかり絞って下さいという事です。方法を考えるのは後でいいです。方法ありきになってしまうとどうしてもテーマがずれてしまうことがあります。その点をしっかり踏まえてお願いします。

本日は大変お忙しい中、第18回看護研究発表会にご参加いただきありがとうございます。

一年間を通し、看護研究の取り組みに支援を下された松本先生へ改めて感謝申し上げます。そして、本日研究発表を終えられた発表者の皆様、共同研究者の皆様、本当に一年間お疲れさまでした。多忙な業務の中で、熱意をもって取り組んでこられた研究への努力に敬意を表します。今年度は協議会会員のみとなりますが数年ぶりに参集型の発表会を無事開催することができました。画面越しでは成し得ない対面での活気あふれる研究発表会となり充実した時間となった事と感じています。

本日発表された研究の成果を協議会会員さらには会員以外の方々とも共有し、共に学びあっていくことで看護の質が向上し「住み慣れた街で誰もが安心して暮らしていく」ための看護実践へと発展していくことを期待しています。以上を持ちまして閉会の挨拶とさせていただきます。



閉会あいさつ
訪問看護ステーションどんぐり
協議会研修委員長 原田 友香氏